九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

哲学者による維新 : 戦後史学史のなかの上山春平

山口, 輝臣
九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門

https://doi.org/10.15017/1516118

出版情報：史淵. 152, pp.1-29, 2015-03-14. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

九州大学大学院人文科学研究院
『史淵』第152輯抜刷
2015年3月発行

哲学者による維新：
戦後史学史のなかの上山春平

山口輝臣

哲学者による維新：
戦後史学史のなかの上山春平

山　口　輝　臣

はじめに

ただいまご紹介にあずかりました山口輝臣でございます。本日はお招きいただき、ありがとうございます。

私が、本日この場でお話をすることになったのは、ひとえに、上山春平さんの娘さんであるあゆみさんとの関係――と申しましても、やましいものではございません。九州大学にて同僚として、いろいろとお世話になっているということです――によります。なにかの折りに、春平さんに関心をもっていますと、あゆみさんへお伝えしたことがあり、それを覚えていらっしゃったことが、今日に繋がったようです。

私自身は、上山春平さんと面識があったわけでもなく、その薫陶を受けた方々から学んだこともありません。そのため、本日のお話は、どうしても、もっぱら上山春平さんが書いたもの言ったことから推し量っていく形になってしまいます。しかし、それらからだけでも、上山春平という人物の広がりと奥行きをお伝えすることは、不可能でないはずだ――そうした考えのもと、以下では、前の画面を使いまして、できるだけ上山さんご自身の文章や発言を引用しながら、話を進めていきたいと考えております。

最初の著書

さて、上山春平さんは実に多方面で活躍した人でした。そのため、会場の皆

さんも、上山春平という名前を聞いて思い起こすものは、それぞれ違うかもしれません。そこでまず、上山さんがどんなお仕事をなさったのか、著作集[1]の各巻のタイトルを示すことで、確認しておきましょう。「哲学の方法」、「歴史の方法」、「革命と戦争」、「天皇制のデザイン」、「神と国家」、「日本の深層文化」、「仏教と儒教」、「空海と最澄」、「創造的な思想家たち」、「日本文明史序説」。お仕事が、哲学・歴史・宗教、日本・東洋・西洋、古代・中世・近代といった壁をあっさりと乗り越えて展開されていることがお分かりになるかと思います。

では、そこでお尋ねします。上山春平さんのはじめての著書（単著）はなんだかご存じですか？　それは、1962年（昭和37）年2月に三一書房から刊行された『歴史分析の方法－比較史方法論序説』という論文集です。これは、大幅な再構成を経て、1968年に『明治維新の分析視点』（中央公論社）へと脱皮します。すなわち上山さんの第一作目は、明治維新を中心とする比較史の研究だったのです。

このことをご存じなかった方もいらっしゃるでしょう。あるいはこれを聞いて、意外な感じをもたれた方もいらっしゃるかもしれません。京都大学で哲学を学んだ上山春平の最初の著書の主題がなぜに歴史、それも明治維新史なのか？　そうした点を理解するには、当時の研究やそれを包んでいた状況を踏まえた上で、上山さんの哲学に対する考え方を知る必要があります。本日のお話では、これらの点を軸に、上山さんのその後の活躍を予感させる最初の果実ともいうべき明治維新史研究について、考えていこうと思います。

すっかり過去のものとなった著書

とはいえ、誤解を怖れずに言えば、『歴史分析の方法』・『明治維新の分析視点』は、ある意味ですでに過去のものである、と言えます。たとえば、収録された論文のなかでもっとも古い1956年の「明治維新論の再検討」[2]は、ちょうどその年に出た宮川透・鹿野政直・石田雄による三冊の本[3]に対する書評論文ですが、のっけからこう来ます。

講座派系理論の基本的論点は、明治維新にかんするつぎの二つの規定に要約できる。(1) 明治維新はブルジョア革命ではなく、絶対主義の成立に他ならない。(2) 維新政府は土地革命を遂行せず、したがって封建的土地所有を廃止しなかった。／私は、右の二点にかんして、つぎのような疑問をもつ。(1) 明治維新はブルジョア革命の一形態ではないか。(2) 維新政府による、版籍奉還、地租改正、秩禄処分、という一連の処置は、有償方式による封建的土地所有の廃止とみることはできないか。それは、ブルジョア革命の基本的条件としての土地革命の一様式とみることはできないか。

講座派ってなに？　ブルジョア革命とか絶対主義ってなに？　そんな方もどうぞご安心を。あとで簡単に説明いたします。いまは、ひとまず、上山さんが、講座派への宣戦布告といった趣の文章を、1956年の末に発表したことだけ確認して、話を先に進ませます。『歴史分析の方法』・『明治維新の分析視点』の基調は、上の引用からもお分かりのように、明治維新についての先行研究への徹底した批判にありました。

ところが、上山さんが批判した相手たち、具体的には、平野義太郎（1897 ～ 1980）、山田盛太郎（1897 ～ 1980）、野呂栄太郎（1900 ～ 34）、羽仁五郎（1901 ～ 83）、井上清（1913 ～ 2001）、遠山茂樹（1914 ～ 2011）といった人びとの研究は、現在の明治維新史研究に、直接的な影響力をほとんど持っていません。たまたま手許にあったので、昨年（2012年）12月に刊行された『明治維新』という本[(4)]をめくってみますと、巻末に「参考文献」が載っていますが、これらの人びとの書いたものは見当たりません。別にこの著者が独特なわけでも、また最近になって急にそうなったわけでもありません。行きがかり上、自分の話をしますが、私が2000年に共著で出した『19世紀日本の歴史―明治維新を考える』という放送大学テキスト[(5)]には、ざっと200冊ほどの参考文献を掲げました。ところがそこにも、かれらのうちどなたも顔を出しません。20世紀最後の年ですでにそうだったわけです。控えめに言って、上山さんがとりあげた人たちの研究は、現在の明治維新史研究において、「参考とする必要性は極めて低い」と評価されていることになります。

研究なんてそんなもんだ、50年以上前のものが普通に通用している方がどうかしている――そんな声があるかもしれません。そうした分野もあることでしょう。しかし歴史学の場合はちょっと違います。たとえば日本古代史ですと、同じ頃に活躍していた石母田正（1912～86）の研究はバリバリの現役です。また、さきほど触れた『明治維新』の概説書や、私たちの本のなかでも、1930年代の研究書はごく当たり前に使われています。いまでも通用している同時代の研究書はいくらもあるのです。むしろ上山さんが批判したような人びとのものだけが、ぽっかりと浮き上がり、いつのまにか滅多に見向きもされない存在へとなっていったのです。そして、先取りして言うと、そうした研究の地殻変動をもたらした一人が、ほかならぬ上山春平でした。

さきほど、『歴史分析の方法』・『明治維新の分析視点』は、ある意味ですっかり過去のものだといいました。しかしそれは、上山さんの議論に意味がなかったからそうなったのではありません。上山さんの批判が効果を持ち、その批判対象の研究が過去のものへとなっていったことにともなってそうなったのであり、逆から言うと、上山さんのお仕事は、いまの明治維新の研究状況をつくりだしたものであったと言うことができます。それは現在の起点となるお仕事だったのです。

「哲学の力」と「明治維新論の再検討」のあいだ

さて、もう一度、論文「明治維新論の再検討」について考えてみましょう。1956年に書かれたこの論文は、上山さんが自らで立てた研究プランに沿ったものでした。この1年半ほど前、上山さんは同じ雑誌『思想』に「哲学の力」(6)という文章を発表しています。いまこそ、「権力のための哲学から、民衆のため、真の意味での国民の哲学」に新しく生まれ変わるチャンスであるという認識のもと、そのために有効な方法として、ふたつの共同研究のプランを提案したものですが、そのうちのひとつが日本近代哲学史研究プラン(7)。そのプランを実践した記念すべき第一歩が「明治維新論の再検討」ということになります。

ところが「哲学の力」をよく読んでみると、あることに気づきます。そこに掲げられた図には、「テーマａ」に「啓蒙主義哲学」とあって、具体的には明六社などを研究するものですが、その政治史的背景に「絶対主義形成期」、経済史的背景に「原始蓄積期」という文字が見えます。これは、明治維新によって絶対主義が成立したと考えていることを意味するはずです。まさしく一年半後に「明治維新論の再検討」の冒頭で自身が疑問視し、批判した見解にほかなりません。

言い換えると、「哲学の力」を書いた1954年には、ごく普通に「講座派」の学説に従っていた上山さんは、56年末までにそれを批判する側に回ったということになります。1年半のあいだに一体なにがあったのでしょうか？

台湾・京都・田辺

じらすわけではありませんが、まずは、ここに至るまでの上山さんの軌跡をたどることからはじめましょう。

上山さんは1921年（大正10年）に台湾で生まれました。台湾での生活について、あまり詳しい記述は残していません。「たえず痛感させられてきた郷土（ハイマート）喪失（ロス）の思い」(8) という言葉があり、このあたりの事情を垣間見る思いがします。また「過密な人情の世界というか、日本の農村のように人情のきずなのがんじがらめなところでは育たなかった。だから、そういう意味ではそういうものに対して音痴のところがある」(9) という、上山さんの日本文化論を見ていく上で示唆的な文章もあります。1937年（昭和12年）に台北高等学校に入学。躁状態になって休学し、台湾周遊や内地旅行をしたかと思えば、鬱状態になって自殺を企てて失敗するなど、不安定な時期を過ごします。しかしここで『善の研究』に触れたことにより、関心が人文地理から哲学へと移り、カントと取り組みはじめます (10)。

大学は京都。文学部哲学科でいわゆる純粋哲学を専攻し、田辺元のもとで卒業論文「カントにおける象徴の問題」を提出します。上山さんの学年は、途中

で修業期間の短縮があって1943年の9月に卒業。すぐさま海軍予備学生に。そして回天特別攻撃隊員となりますが、生き残ります。この体験については、上山さん自身の文章がいくつかあり[11]、またご存じの方も多いかと思いますので、詳しいことは省きます。ここでは、終戦について、「このときの気持をうまくいうことができないのです。嬉しかったといっても、口惜しいといってもウソになります。眩惑に似た感情の激突と沸騰とがあった。どんな感情がどのようにぶつかりあい、どのように煮えたぎったか、それをうまく説明できないのですが」と述べていること[12]、そしてこうした体験をした上山さんにとって、戦後への「着地」が容易なことではなかったことを、次の言葉から感じ取っておくことにとどめます。「私は、特攻の戦列に加わった体験をとおして、戦争目的にかんしては戦友たちと共有した理想像を、戦後もしばらくは執拗にいだきつづけた」[13]。

戦後は両親の出身地である和歌山に引き上げ、又従兄弟の古代史家・北山茂夫（1909 ～ 84）の世話で田辺にて教職に就き、またかれを介して、はじめてマルクス主義に関心を持ちます[14]。マルクスとのつきあいは、その後、1948年に田辺を離れて愛知学芸大学に移るとさらに深まり、『資本論』や日本資本主義論争の検討を開始するまでに至ります。

遅かったマルクス主義体験

ここで注目したいのは、マルクス主義に興味を持ちはじめたのが戦後であったという点です。上山さんのようないわゆる戦中派はそんなものだ、と思われる方もいらっしゃるでしょう。しかしそうとばかりは言えません。たまたま私が聞き取りをした考古学者は、上山さんと同年に生まれ、同じ年に大学へ入った経歴の持主ですが、高等学校時代のある日、河上肇の『第二貧乏物語』が寮の机の上に置いてあったり、友人が運動に関わって逮捕されたりと、マルクス主義との接点はこの時期でもまだ普通にあった様子を話してくれました[15]。それと比べると、上山さんの旧制高校から大学にかけては、マルクスの影があ

まりに薄い。

実のところ、このことは上山さん側の態度に起因します。「僕は、戦前、社会科学的訓練を全然うけていなかった。観念論的な哲学をやってきました。マルクス主義というのは、田辺元とか西田幾多郎とか僕の尊敬していた先生たちによって原理的に批判されており、あんなものは大したものでないというように思っていた」(16)。戦争から戻って、そうした見方を改め、いわば「遅れて」マルクス主義を体験していくわけです。「遅れて」マルクス主義を体験したという意識は、世代論と重ねられていくことで、さらに強められていきます。

> 青年期に大正リベラリズムの空気を胸いっぱいに吸いこんだ世代は敗戦を四十代で迎え、昭和初期のマルキシズムの波をかぶった世代は敗戦をほぼ三十代で迎えた。彼らには敗戦と同時に言論活動を展開しうる蓄積がすでにあり、しかも環境は申し分がなかった。戦時中とは逆の言論抑圧のもとで、彼らのワンサイド・ゲームが賑やかに進行されたのである(17)。

先に登場した講座派の人びとのうち、敗戦時、平野義太郎から羽仁五郎までが40代。井上清と遠山茂樹は30代。そして上山自身は24歳。上の世代とは違って「蓄積」がないという自意識により、急速にマルクス主義を咀嚼していったのでしょう。

人文研におけるフランス革命の共同研究

1954年4月、鶴見俊輔の後任として、京都大学人文科学研究所の助教授に就任。33歳。西洋部。これまで述べてきた軌跡からいって、着任の時点では、日本の近代について、どっぷりと講座派の理論につかっていたと考えるべきでしょう。たとえば翌1955年に「弁証法と形式論理学との関係」という論文を『国民の科学』――この雑誌は、日本共産党の指導下にあった民主主義科学者協会の機関誌です――に発表している(18)のも、そう考えればさしておかしなことではありません。なお、上山さんの着任直前、明治維新について論敵となる井上清が日本部の助教授になっています。

ところが、そうした上山さんが、1年半のうちに、講座派支持から講座派批判へと立場を明確に変化させます。本人によれば、「たまたま」――このことを回顧する際にはほとんど必ずこの表現を使っています――人文科学研究所におけるフランス革命の共同研究に加わったことがきっかけとなった、ということです[19]。桑原武夫が主宰したこの共同研究は、1949年開始のルソー研究、50年開始のフランス百科全書研究に続くもので、これらの成果報告書3部作が、京大人文研の名を不動のものにしたことは、私がわざわざ述べるまでもないでしょう。そうした共同研究に、上山さんは途中から参加することになりました。「たまたま」といっているのは、人文研に奉職するようになり、しかもそこでフランス革命の共同研究をしていたという予期せざる二つの事柄が重なったことを表しているのでしょう。これまで、主にカントを勉強し、そこからパース、さらにはヘーゲル・マルクスと対象を広げつつあったとはいえ、そこにフランス革命と直に結びつくものを見出すのは難しく、「たまたま」というのも頷けます。またそうした上山さんが、フランス革命に関わって、自らのテーマを設定しようとする場合、それが「明治維新とフランス革命の比較史的研究」になったのは、すでに愛知学芸大学時代に日本資本主義論争の検討をはじめていたことからいって、自然の成り行きに思えます。

マルクス主義による明治維新史研究―戦前編

さて、ここらで、マルクス主義による明治維新史研究の歴史について、今日のお話に必要な範囲内で、簡単に見ておきましょう[20]。

マルクスやエンゲルス、のちにはレーニン・スターリンなど、いわゆるマルクス主義の古典を主たる参考文献にする諸研究が日本で盛んになったのは、ロシア革命後、おおよそ1920年代のことです。その最大の特徴は、これまでの学問体系とは異なり、研究のみならず実践――政治、さらに言えば革命――の方途まで指示するその包括性であり、青年を中心に知的世界を席巻します。マルクス主義は、人文・社会科学全般を中心に、自然科学や芸術・文化活動にま

で影響を及ぼしますが、その焦点は、エンゲルスのよく知られた言葉に、「自然科学でないすべての科学は歴史科学である」とあるごとく[21]、なんといっても歴史、そのなかでも日本史、とりわけ明治維新でした。

このうち、日本史と明治維新に焦点が集まるという点については、若干説明が必要でしょう。講座派の批判的継承を唱えたある明治維新史研究者の文章を引いておきます。「革命運動が自己の戦略を確定するためには、当年の日本国家・社会の本質規定がなされねばならず、さらにそのためには当年の日本国家・社会の出発点の様相を解明することが、革命運動の戦略決定にとって必須の一課題となる。このような、革命運動の要請にささえられて科学的維新研究が本格的に出発したのであり、ここではいわば学問と政治とがわかちがたく結合していたのであった」[22]。革命を起こそうという場は日本であり、その革命がどのようなものであるかを決めるには現在の日本について本質を規定しなくてはならず、そのためにはその出発点の解明が必須で、その出発点こそが明治維新であるという思考回路です。革命という目標と明治維新史研究とは深く結びついていました。

研究は次第に深まり、マルクス主義に依拠した研究者のあいだで論争が闘わされていきます。その代表格が日本資本主義論争です。岩波書店から1932～3年に出された『日本資本主義発達史講座』が議論の土台となったため、『講座』の執筆者やそれに近い立場に立つ人びとを講座派、講座派を批判した人びとを、かれらが拠点とした雑誌の名をとって労農派と呼んでいます。

両者の対立点は多岐にわたり、上山さんが、「資本主義論争の泥沼に足をつっこんで文字どおり七転八倒した」と述べているように[23]、細かい点に突っ込んでいくとキリがありません。ここでは、明治維新について思い切って単純化して話をします。

まず、革命として、フランス革命のようなブルジョア革命と、ロシア革命のようなプロレタリア革命の2つの類型を前提に、ブルジョア革命によって資本主義となり、さらにそれがプロレタリア革命によって社会主義になるという段階を想定します。つぎに、これらを念頭に、さて明治維新はどうなのか、とい

う問を立てます。明治維新をプロレタリア革命であると考える人はまずいないので、回答は大きく2通りに分かれます。ひとつはブルジョア革命であるというもの、もうひとつはブルジョア革命ではないというもの。ブルジョア革命であるとすれば――これが労農派です――明治維新以後は資本主義社会ということになり、目指す革命はプロレタリア革命となります。これに対し、明治維新はブルジョア革命ではないとすれば――こちらが講座派です――維新後もそれ以前の段階――これを絶対主義といいます――ということになり、目指す革命はブルジョア革命となります。

さきほど、マルクス主義においては、研究と実践が不可分であると述べました。この点は日本資本主義論争についても同様です。講座派の見解は、基本的にコミンテルンによる32年テーゼ（日本の共産主義者に対して情勢分析と運動方針を提示したもの）に沿っていて、日本共産党の革命戦略とも一致していたのに対し、労農派は共産党とは距離を置く人びとによって構成されていました。しかしマルクス主義に基づく研究は、1930年代の末になると、弾圧などで遂行困難となり、下火となっていきます。

マルクス主義による明治維新史研究―戦後編

戦争が終わると、いわゆる皇国史観などがくずおれるなか、マルクス主義は華々しく再生、上山さんの言う「ワンサイド・ゲーム」を展開します。家永三郎（1913 ～ 2002）は、1953年に出した自著の序文で、「今日では、唯物史観の影響をなんらかの形で被つてゐない歴史家…は、かへつて数へるのに骨が折れるくらゐである」[24] と、述べています。マルクス主義歴史学は合法化され、さらには正統化されます。

そうなっていく一因として、マルクス主義と、歴史学における専門化の進展との相性の良さがありました。再び家永三郎の言葉ですが、マルクス主義に基づく「歴史認識の統一的方法」は、研究者に対し「自分の分担する部門が日本歴史全体の中でどんな地位と機能をもつものであるか」を教えてくれる、とい

います[25]。たとえてみれば、研究における地図のようなものでしょう。それがあることで、各研究者は、小難しい理論に気を取られず心置きなく個別の研究対象に邁進することができ、しかもそれが一段落すれば、次なる研究課題をまたそこから読み取ることができたのです。マルクス主義は、戦後になって一挙にふくれあがった歴史研究への新規参入者をつつがなく吸収していく上で、重要な役割を果たしたのです。

そのなかでも講座派は、経済学はもちろん、歴史学や法律学などさまざまな分野に数多くの人材を擁しただけでなく、その背後に見え隠れする共産党の威光――戦時下にも屈しなかった党という像が流布していました――に支えられ、知識人の世界で圧倒的な優位を築きました。

しかしそうした状況は数年にして崩れます。1950年1月にコミンフォルム（欧州共産党情報局）が「日本の情勢について」という文章を発表し、日本共産党の平和革命論を批判すると、日本共産党は内部分裂を経ながら武装闘争路線に転じます。占領状態からの脱却を掲げて民族の危機をあおり、山村工作隊や中核自衛隊などを組織し、中国革命をモデルにした武力革命を目指して活動を繰り広げると、GHQはこれにレッドパージで対抗します。

研究と実践とが分かちがたく結びついていたマルクス主義歴史学は、これに並走していきます。党の指導で「国民的歴史学」運動が遂行された結果、たとえば歴史学研究会という学会では[26]、「歴史における民族の問題」・「民族の文化について」などがテーマとして掲げられ、ヤマトタケルを民族独立のシンボルとするような議論（藤間生大1913～）が行われます。また研究者には「農民の闘いを助けにいく」（石母田生）ことが求められ、紙芝居をつくって農村で演じたり、職場の歴史を労働者と共同でつくったりといった運動が展開されます。学会の書記だった藤原彰（1922～2003）が、網野善彦（1928～2004）らによって突然解任されたとか、共産党の指令に基づいて藤間生大が井上清に自己批判書を提出させたかと思えば、形勢が入れ替わると藤間一派は党から一斉に除籍されるといった[27]、実になまなましい「政治」が展開していきました。

1956年

ところが日本共産党は、1955年の第6回全国協議会（六全協）で武装闘争路線を放棄、「国民的歴史学」運動もうち捨てられます。こうして、方針が転変する共産党の指導力とそれへの信頼が衰えていくなか、追い打ちを掛ける事件が起こります。1956年2月、ソ連共産党の第一書記フルシチョフによるいわゆるスターリン批判報告があり、これを受け、10月にはハンガリーでソ連の支配に対する全国規模の蜂起が起こったのです。僅か数年前まで民族独立を強く掲げていた日本共産党は、ハンガリー事件を反革命暴動と規定して済ませました。こうして、多くの知識人が、共産党から、あるいはマルクス主義から離反していきます[28]。当時、東京大学文学部の学生で共産党員であった伊藤隆（1932～）は、六全協のとき「仲間と代々木の党本部に押しかけて抗議し、本部を見限り」、ハンガリー事件では「ハンガリーの反政府運動はよくやった」と、ソ連批判を党の機関誌に書いて文学部班のキャップを首になり、それによって党との縁が切れたと語っています[29]。研究と実践とが結びついていたが故に、共産党という存在への根本的な懐疑は、マルクス主義への懐疑へと繋がっていきます。1956年は、そうした動きが明確に現れた年でした。

この年の元日の朝日新聞には、上山さんが講座派から離れるきっかけをつくった共同研究の主宰者・桑原武夫（1904～88）が「明治の再評価」という一文を寄せ、明治維新は「後進国型のブルジョワ革命と、はっきり認める方がよいのではなかろうか」と提案をします。同じく共同研究の一員であった河野健二（1916～96）は、『市民革命論』（創元社）を出版、フランス革命を基軸により精緻な議論を展開し、いうなれば桑原の論拠を示します。このように1956年には、明治維新に関わって、明示的に講座派的見解を批判した議論が登場しました。

また、明治維新史に関する講座派の代表的論客であった遠山茂樹と、今井清一（1924～）・藤原彰による岩波新書『昭和史』について、亀井勝一郎（1907～66）が人間不在であると述べたのを皮切りに、いわゆる昭和史論争がはじまっ

たのもこの年でした。明治維新以外についても、講座派に対する正面切った批判が堰を切ったように現れたのです。

以上のような歴史についての個別の論点以外でも、丸山真男（1914 ～ 96）は、「『スターリン批判』の批判」[30] において、スターリン批判に関するマルクス主義者の言説のなかから、「本質顕現的思考様式」と「基底体制還元主義」という顕著な型を抽出して鋭く批判を加え、さらにそれらが歴史の見方に滑り込むと「歴史的単線主義」となると、マルクス主義歴史学について、その思考様式にまで遡った批判を行いましました。

このように、上山さんが「明治維新論の再検討」を発表した1956年という年は、さまざまなレベルで、マルクス主義歴史学、とりわけ日本共産党との結びつきが強かった講座派系の歴史学について、本格的な批判がはじまった年であり、そのなかで上山さんは、マルクス主義歴史学の焦点ともいうべき明治維新史について、「明治維新論の再検討」をひっさげて登場したのでした。

さて、この「明治維新論の再検討」ですが、『思想』で活字になるより先に、日本史研究会という京都を拠点とする学会の例会で発表されました [31]。その場にいた松浦玲（1931 ～）は、次のように回顧しています。「例会での上山氏の話に大きな抵抗を感じながらも、どこを突つけば有効な反論になるのかよくわからず、また学生の分際で広言を吐くのもはばかられたので、やむなく、すぐ前の席に坐っていた池田敬正氏をけしかけて論陣を張ってもらった。…他の人からはほとんど意見も出なかったので、上山氏が最後に『つたない思いつきに対して専門家の方々のご意見を聞かせていただいてありがとうございます』という意味のことを言っててていねいに挨拶したのが痛烈な皮肉に聞こえ、私はシャクだった」。すでに松浦玲も、32年テーゼを批判する方向へと進んでおり、「もう忠実なる講座派の使徒ではなかった」。しかし上山の話には違和感を拭えず、その理由を、革命という言葉に託しているイメージの差にあると考えるにいたる。「一九五六年、上山春平氏が講座派批判による独特の明治維新ブルジョア革命説を提示したとき、私はまだ革命をやるつもりだった」[32]。以上は、『明治維新の分析視点』に対する書評の一節ですが、上山維新論の衝撃と、そ

れを受け取る側の知的＝政治的状況との双方を見事に照らし出す文章となっています。

フランス革命・ブルジョア革命・明治維新

では、上山さんの「講座派批判による独特の明治維新ブルジョア革命説」とはどのようなものなのでしょうか？　最大の特徴は、フランス革命とブルジョア革命の関係そのものの読み替えと、その上になされる明快な比較史の作業にあります。その点をよく現している箇所を引用してみます。

> 講座派の人びとは、こうした［32年テーゼに記された－引用者］ブルジョア革命論を基準にして、明治維新は寄生地主制を廃止しなかったばかりでなく、かえってその基礎を確立したからブルジョア革命とはいえない、と主張するが、私は、フランス革命の共同研究（京大人文科学研究所）の過程で、右のような基準ではかるならば、講座派や大塚史学の人びとがブルジョア革命の典型と見るフランス革命さえもブルジョア革命といえなくなるのではないか、という疑いをもつようになった[33]。

講座派と大塚史学――大塚久雄（1907～96）やその影響下にある人びとによる西洋経済史についての学説ですが、上山さんは、この寄生地主制の論点について、講座派と大塚史学とは見解に差がないと考えています――の主張に従えば、フランス革命ですらブルジョア革命でなくなってしまうという知見は、記されているように、人文研の共同研究のなかで得られたものです。なお、上山さん自身は、この共同研究の成果報告書に、「イデオローグの思想と行動」という論文を提出しています[34]。

さて、講座派に従うとフランス革命ですらブルジョア革命でなくなってしまうという場合、そこから先の展開にはいくつかの道があります。講座派の前提をそのままにして、故にフランス革命はブルジョア革命ではない、という結論を導くというのも、そのひとつになるでしょう。しかし上山さんはこの道を選びませんでした。まあ、それでは明治維新史研究に活かしようもないですし。

それとはまったく逆に、フランス革命の現実の姿――より正確には、そうであると上山さんが考えるもの――こそがブルジョア革命であるとし、それに基づいてブルジョア革命像を再構成していきます。たとえば、寄生地主制を廃止しなくてもブルジョア革命なんだ、といった具合に。細部を見ると、過渡期の国家形態がどうのこうのと、いろいろと論点はありますが、筋道だけ追うとそうなります。そして、そこから出来上がったモデルを明治維新へと適用した結果、明治維新はブルジョア革命であるという結論が導かれる、というわけです。結論のみ見ると、労農派と同じですが、それを導く過程はかなり異質なことが分かるはずです。こうして獲得された観点から、講座派の議論をバッタバッタとなで切りにしていきます。

このように、上山さんの議論は、たとえば、ある史料に基づいて、明治維新のある事象について検討を加えるといったものでは、まったくありません。その点は、自らの研究について、「私の維新史研究――正確には維新史論研究と言うべきかもしれない――」と述べている通りで[35]、基本的には、明治維新史の研究についての研究というべきものでしょう。

ただそれを徹底することにより、思わぬ地平が開けてきました。講座派成立の時期にまで遡り、しかも政治との関わりのなかで検討していったことによります。具体的には、野呂栄太郎の学説が形成されていく過程で、かれが27年テーゼと32年テーゼに対応させる形で学説を「変化」させたことを見出します[36]。マルクス主義歴史学の生成期における研究と実践、学問と政治、あるいは個人と組織との複雑な関係を明るみに出したのです。1950年代の日本共産党と歴史研究の迷走を見届けたり、あるいはともにしたりした人びとには、並々ならぬ現実感を持った議論だったと想像されます。

講座派批判の目指すもの

上山維新論のおおよそのところはお分かりいただけたでしょう。では、そうした議論を展開することにはどんな意義があるのでしょうか。上山さんはこう

力強く断言します。

> 私の維新論の今日的な意義は、講座派理論の誤謬を指摘し、日本近代史にかんするこのドグマ化した理論の解体と、新理論の構成の必要を主張した点にある[37]。

これが書かれたのは、上山さんが講座派批判の烽火をあげてから10年のちのことです。はじめの頃の論文には、ここまで激しい言葉はありません。そのことに、この10年間における講座派の凋落を読み取ることもできるでしょう。ただ私には、これが直截な言葉であることを認めつつも、どうもなにか一番肝心なことが言われていないような感じが残ります。あるいは、ドグマ化した講座派理論をなぜ上山さんが批判しなければならないのでしょうか。

その点で興味深いのが、労農派への評価です。講座派が駄目なら労農派にしようという行き方もあり得たわけで、なぜ上山さんはそうしなかったのか。この点についてはこう述べています。

> しかし、講座派理論の重大な欠陥が明らかになったからといって、それと反対の立場にある労農派の見解をただちに受けいれたわけではない。講座派の立場をとる理論家が、経済学、法律学、社会学、歴史学等のさまざまな分野にまたがっていて、その結果、経済過程と政治過程と思想過程を統一的にとらえようとする観点が提出されたのに対して、労農派の立場をとる理論家は主として経済学の分野にかたまっており、したがって、経済過程の分析は精密であるが、歴史過程の統一的把握という点では講座派にくらべてかなり見劣りがするように思われた[38]。

労農派は「歴史過程の統一的把握」という点で講座派に見劣りするという物言いから、「歴史過程の統一的把握」を目指すという点で講座派は間違っていないと考えていることが分かります。経済は経済、政治は政治、思想は思想というのは間違いだという考えが、上山さんにはあり、労農派はその点で駄目だというのです[39]。

同じことを、上山さんは、少し違う言葉で語ることもあります。羽仁五郎との対談で、上山さんは、講座派のなかでは羽仁五郎と服部之総とにもっとも共

感をおぼえると述べたあと、その理由をこう言います。「他の人びとが経済史に視野をとじこめる傾向があるのに対して、経済、政治、思想の全体を展望しながらいわば哲学的に仕事をすすめておられる」、と[40]。ひとつ前の引用と重ね合わせると、ここにおける「哲学的」とは、「歴史過程の統一的把握」の言い換えにあたります。「哲学的」というその方向性は正しいのに、実際の議論があまりに酷い――上山さんの講座派批判は、こうした感覚から発していたのです。

しかしここにおける「哲学」という用法は、普通のものとはどこか少し違うようです。そしてその点が分からないと、上山さんが目指す「歴史」も分からないでしょう。この点はのちほど掘り下げてみます。

上山維新論への批判

こうして世に現れた上山維新論は、ある意味ではその期待通り、反論に包まれます。総合雑誌や学会誌などでは、上山さんとその批判者とが対論する機会が設けられます[41]。反論の内容は、もちろん人によって異なりますが、上山さんのこうした議論の背景に、なんらかのイデオロギー的意図を想定する態度はほぼ共通して見られます。たとえば、井上清は、「明治維新をナショナリズムに関連させて見ようとする、そして階級斗争史観とか、人民が歴史の推進力だとかいう見方をしりぞける」「みごとな統一戦線」が組まれているという見方をし、その一人として上山春平を位置づけます[42]。また遠山茂樹は、「明治維新とフランス革命とを同質のブルジョア革命だと主張することで、現代にたいし何を発言しようというのか」との疑問を述べた直後に、権力による最近の「憲法改悪」「教科書検定」などを指摘し、権力側を利する議論であるとの性格付けを行います[43]。こちらに対して、上山さんは、遠山の思考様式にまで踏み込んで反批判をしますが[44]、遠山も屈せずに再論します[45]。このように、上山の批判へもっとも真摯に対応したのは、遠山茂樹であったといえます。また、戦前来の講座派――たとえば羽仁五郎――は、上山さんの野呂栄太郎論に

強く反発し、戦後講座派――井上清・遠山茂樹――らは、主に明治維新＝ブルジョア革命論に反応する傾向もありました[46]。

ただここでとくに注目したいのは、論争のなか、戦後講座派の双璧ともいうべき井上清と遠山茂樹が、ともに明治維新がブルジョア革命かどうかという議論を回避する方向性を打ち出していることです。以下は順に井上清、遠山茂樹の言です。

> 明治政権が絶対主義であるか、それともブルジョア独裁という意味でのブルジョア政権であるか、そういうことばかり議論してもつまらん、明治維新の史的意義はそんな議論からは出て来ない[47]。
>
> ブルジョア革命か否か、どちらかにしいては片ずけなくては気がすまぬ問題の立て方自体、現実が要請する問題意識からずれているといえるかもしれない[48]。

論争で苦しくなるとそうした方向に議論を持っていくこと自体は、予想の範囲内と言えなくもありません。ただ講座派のようにマルクス主義に立脚する人びとにとって、このことの影響は多様かつ複雑で、そのなかには、研究と実践とのもっとも分かりやすい関係――目指す革命の性格規定のための学問――が、もはや保持できなくなったという、マルクス主義の魅力を大きく退色させる事柄が含まれます。またより若い世代の歴史研究者のなかには、この維新史論争や、ほぼ同時期に行われた昭和史論争において、上の世代の研究者たちが、権威主義的な回答[49]によって新説を否定する態度に、幻滅が広がりました[50]。かれらの世代は、こうした論争により、研究と実践との固き結合が緩んだところを見逃すことなく、まずは講座派内の見解の差異を活用する形で、遠山茂樹ら戦後講座派を批判する仕事を[51]、やがて上の世代とは異なる新たな研究課題――政治史[52]や民衆思想史[53]――を見つけ出し、上の世代を乗り越えていきます。

その意味で、講座派をドグマと見なし、その解体を主張した上山さんの試みは、十分に成果を上げました。上山さんが批判した人びとが、最初に述べましたように、いまや明治維新史研究ではほとんど参照されることなく、せいぜい

戦後の知識人史や社会運動史のなかへと収まってしまったのは、まさしくドグマが解体された証左といえましょう。

ドグマ解体の先に

そのことは、上山さんのドグマ破壊という行為そのものにも跳ね返ってきます。明治維新とフランス革命との比較という、ドグマと同じ土俵に乗り、そこで解釈換えによってドグマの解体を試みるその手法は、ドグマの崩壊とともに、それと同じ運命をたどることを免れないからです。上山さんの本が、ある意味で過去のものであるとはじめに述べたのは、このこととかかわってきます。敵を倒したことで、その役割を終えたという面が、上山さんの最初の著書には、確かにあるのです。

しかし上山さんはそこにとどまることはありません。明治維新論のさらにその先を見据え、明治維新論を踏み台に跳躍していきます。これによって上山さんの明治維新史研究の仕事が、自身の学問のなかでその先に繋がっていったばかりでなく、現在を生きるわれわれへと繋がるものとなりました。

ひとつはマルクス主義歴史学の再構成です[54]。その際に参考にしたのは、梅棹忠夫（1920 ～ 2010）の「文明の生態史観」です。ご存じの通り、上山さんが明治維新論を最初に発表した翌年の1957年に公開された論考です[55]。上山さんは、マルクス史観と生態史観との統一的把握を模索して、こんなことを言っています。「人類史にかんするマルクスの理論は、人間の生物的側面と人間生活における環境的要因をより強調する生態学的見地によって補強されねばならないのではあるまいか」[56]。そしてこれからも分かるように、上山さんは、講座派をドグマとして攻撃したものの、マルクスを否定したわけではありません。それどころか、その基本的な発想を是とし、できるだけそれを活かそうとしました。それは、「論文のねらいは、マルクス史観の否定ではなく、その適用範囲の限定にある」[57] とか、「マルクスの発展段階説は、西部ユーラシアの局地的尺度としては適切かもしれないが、人類史の普遍的尺度として再検

討を要する…私は、マルクスの段階区分は再検討を要すると思うが、段階区分の指標を生産方法の変革にもとめる彼の基本的着眼には、修正の必要をみとめない」[58] という言葉からも明らかでしょう。そのため、生態史観などと整合性を持たせやすいよう、マルクス主義の発展段階論について、複線的な解釈を提示しています[59]。

つぎに歴史研究の具体的展開方法の模索です。

> まず、歴史の方法を社会科学の方法と同一視する考えは否定されねばならない。歴史研究は、社会科学の方法と精神科学の方法を二つながら必要とし、結局において、人間科学の方法を全体として必要とする。しかし、一個の研究者が広範な人間科学の全分野にわたる方法論を身につけるということは、ほとんど不可能にちかい。…では、どうすればよいのか。西南ドイツ学派の哲学者たちがすすめるように、科学的分析を断念して、歴史的事実の記述に専念すればよいのか。それとも文学ないし半文学の方向に転進すればよいのか。そのいずれをもえらばないとすれば、残された道は共同研究であろう。[60]

人間科学を社会科学と精神科学とに区分し、その双方の方法を必要とする歴史研究の難しさを指摘して、それを可能にする唯一の道として共同研究を提唱する。その結論自体は、「哲学の力」で述べていたことと変わりありません。しかしそれを歴史研究の方法に由来するものと位置づけることで、共同研究の基盤は確固たるものとなりました。あるいは現に実施している共同研究が新たな意味づけを得たと言ってもいいでしょう。ついでながら、共同研究以外の道として描かれる「歴史的事実の記述に専念」と、「文学ないし半文学の方向」というのが、まるでその後の歴史研究の推移を予見したかのように思えてならぬのは、私だけでしょうか。

明治維新からあの戦争へ

そしてもうひとつがより近い時代への言及。具体的には「あの戦争」につい

ての議論の展開です。

> あの戦争を「太平洋戦争」と呼ぶようになって以来、いつのまにか、あの戦争における日本側のふるまいをあちら側から裁く立場に自らを置く風潮が言論界を覆うに至った。／ところが、そうした立場は、六〇年安保の燃え上がりのなかで、破産の宣告を受けた[61]。

1961年に発表された「大東亜戦争の思想史的意義」[62]は、毀誉褒貶に包まれました。上山さんが記しているように、この論自体が60年安保に触発されたものですが、分析の手法そのものは、明治維新史の時のものをそのまま「あの戦争」まで延ばしてきたものでした。折からのライシャワー駐日大使の着任などと絡めて、マルクス主義史学は、かれらがアメリカ生まれの帝国主義的歴史観と主張する「近代化論」の典型として、この論文を激しく攻撃します。たとえばこんな具合に。「この上山論文こそ、まさにライシャワー攻勢のなかで登場した、安保改定後の「新転向」理論ともいうべきもので」云々[63]。明治維新に引き続き、「大東亜戦争」をめぐっても、マルクス主義歴史学とのあいだで論争が繰り広げられました。同じ構図の対立は、1980年代に、日本文化論や国際日本文化研究センターの設立などをめぐって、もう一度繰り返されます。

しかし明治維新史の議論と異なっていたのは、今回の場合、そこに「体験」という要素が噛んでくることでした。

> ぼくが第二次大戦の議論をするときは…常識人としての声が体験にひっかけてナマででてくるんですよ。戦後のあの戦争に対する扱い方が少し上すべりじゃないかという感じが強いものだから、ぼくがじっくり見てきたかぎり、そうじゃないんだ、というだけのことですよ。否定の声です[64]。

これらを通じて、上山さんは、明治維新史論の先へと仕事を進めていったのです。そして1968年、いわゆる明治百年の年に、『歴史分析の方法』を再編集した『明治維新の分析視点』を出版し、明治維新研究にケリをつけます。一方、マルクス主義歴史学は、政府主催による明治百年記念行事への反対運動を試みるものの、国民的運動とならずに失敗。その学問が、国民や隣接諸科学と乖離していることは、もはや隠しようがなくなっていました[65]。

哲学の作法

さて、そろそろ最初の問いに戻りましょう。京都大学で哲学を学んだ上山春平の最初の著書の主題がなぜに歴史、それも明治維新史なのか、というものです。明治維新がこの時点でどのように問題となっていたのかは、すでに随分と述べました。そこになぜ上山さんが入っていったのかという問いです。本人の言葉を紡いでいきましょう。

> 私自身としては、哲学を放棄して歴史をやっているというつもりはない。自分のやっていることは、一種の「歴史哲学」的研究に他ならないと思っている。…具体的な歴史分析に足をふみいれて歴史家たちの論争点にたいする自己の立場を明らかにするという態度をとったのは、敗戦後まもないころに感銘を受けた武谷三男氏の「哲学は如何にして有効さを取戻しうるか」…という文章の影響に負うところが少なくない。…それは、私なりの理解によれば、認識論における「弁証法」的な見地、つまり、思想は現実の場におけるテスト（実験ないし実践）を媒介として発展する、という視点にたいする共感に他ならない[(66)]。

武谷三男（1911 ～ 2000）の「哲学は如何にして有効さを取戻しうるか」は、『思想の科学』の創刊号（1946年5月）に載ったもので、そこで武谷は、哲学者による科学論が、科学の最前線をまったく踏まえていないことを、物理学の立場からきびしく批判しました。そこでの科学を歴史に置き換えてみれば、上山さんの言わんとしたことは見えてくるでしょう。上山さんは、歴史家に転進したのではないのです。それはあくまでも哲学なのです。

では、上山さんはなんの「テスト（実験ないし実践）」をしたのでしょうか。これについては松浦玲との対談での発言が参考になります。

> 僕は、マルクスは経済学者ではなくて哲学者だと思ってますからね。『資本論』だって『経済学批判』だって『経済学原論』じゃないでしょう。そういう点で彼の哲学の強さを、僕らが実際にこの眼でたしかめることのできる史料でテストしてみたいと思ったわけです。…大体これは僕のマルク

ス研究の一環なんで、文献だけでやるんじゃなくて、史実を媒介としてテストにかけたわけです[67]。

明治維新を研究したのでは、はじめからなかったのです。マルクスの哲学を、歴史という場においてテストしたのが、上山維新論だったのです。その意味では、むしろ上山さんがドグマティストと批判した人びとの手法を、さらに徹底的に推し進めたものだったと言うこともできます。

ただしやるからには、歴史家と対抗できる水準でしなければなりません。そのため、「素人の立場で、向う見ずに歴史家の方と同じ土俵でむちゃくちゃに相撲を取ってきたわけですよ」[68]と述懐されることにもなります。しかしそうすべきなのであり、それは不可能なことでもありません。

大学院をでれば、一応は専門家の卵になれるわけですから、こちらも、三、四年かける気になれば、一応のレベルにまでは行けるわけです。それにいろいろな雑学をしてるから、学生たちが三年でやるところを、一年くらいでやることも不可能じゃない。もっともこれはぼくの理想であって現実とは遠いのですが[69]。

しかしこういうことをするのが哲学者というならば、そこにおける哲学・哲学者像は、たとえばカント一筋うん十年といった姿とは、あきらかに異なるものに違いありません。

いまの世に哲学者であること、とくに職業哲学者であることは、一言にしていうと、大へんつらいことである。それは、分業化・専門化の大勢にさからって、本来的に非専門的もしくは反専門的な学問を業とすることを意味するからだ[70]。

しかしいくらつらくても、上山さんは哲学者をやめません。そして哲学はその役目をしっかりと果たさねばならないと考えます。では、その役目とはなんでしょうか？

「ヒストリー」というのは、もともと記述ということでしょう。ナチュラル・ヒストリー、つまり博物学という使い方を思いおこしていただければいいわけです。僕が歴史をやっているのは人間博物学をやっているつもり

なんです。ヒューマン・ヒストリーを。それでもってドグマをひっぱがす。ひっぱがしたいドグマは山ほどある。もともと哲学の役目というのはそういうものではないかと思う。ソクラテス以来、ドグマをひっぱがすのが本来の役目であって、それ以外なんにもないんだ。哲学というのはネガティブな学問ですよ。なんかつくってゆくというよりも、できかけたかさぶたみたいなものをひっぱがすだけ[71]。

ドグマをひっぱがす。かさぶたをひっぱがす。それこそがソクラテス以来の哲学の役目であり、哲学はそれに尽きる。ひっぱがしたいと考えた対象が、たまたま明治維新であったり、太平洋戦争であったりしたため、歴史を研究し、あたかも歴史家のように見えただけで、上山春平は、どこまでも哲学者としてそれをしていたのです。

西田幾多郎・今西錦司・上山春平

上山さんのこうした哲学・哲学者像の形成に、大きな影響を与えたと思われるのが今西錦司（1902 ～ 92）です。1957年に発足した今西錦司をチーフとする人文科学研究所の共同研究「霊長類におけるカルチュアとパースナリティー」に上山さんも参加し、深層文化論の着想を得ていくことになりますが、今西についてこう述べています。

私は今西さんを哲学者だと考えている。しかも、明治以来の数少ない独創的な哲学者の一人だと考えている。…西田さんと今西さんのちがいは、西田さんが哲学の世界から一歩もふみだそうとしなかったのにたいして、今西さんが哲学の世界から科学の世界への道をつけた点である[72]。

西田と今西という二人のうち、上山さんの目指すところがどちらにあったかは、もはや言うまでもないでしょう。ただ西田幾多郎と対照的な哲学者となると、すぐに浮かぶのが、阿部次郎（1883 ～ 1959）や和辻哲郎（1889 ～ 1960）といった、いわゆる大正教養主義と結びつけて語られることの多い哲学者たちです。もっとも上山さんは、和辻哲郎については照葉樹林文化論で『風土』に

少し触れた程度で、本格的な言及はないようですし、阿部次郎にいたっては、「私は、阿部次郎の著作に深い共感をおぼえたことはかつてなく、有名な『三太郎の日記』さえ、この稿を書くに当たって初めて通読する機会をもったにすぎない」と[73]、酷評というか、すれ違いというか、そんな趣があります。しかし研究のスタイル――和辻哲郎や阿部次郎も、哲学の世界から一歩も二歩も踏みだし、哲学の世界からほかの世界への道をつけようとしました。和辻哲郎については説明不要でしょう[74]。一方の阿部次郎には、『徳川時代の芸術と社会』[75]など、上山さんが言うような意味での哲学者でないと書かないであろう著書があります――、あるいは哲学者の役割をなにに求めるかといった点などについていえば、案外に近いものがあるのではないでしょうか。その点について考えるには、上山さんの言葉ではなく、むしろその「沈黙」を読み解いていく必要があり、そのためには、本日行ったものとは、一味違った接近法がいりそうです。

ただ間違いないのは、明治維新史研究に「維新」を引き起こしたのが、あくまでも哲学者たらんとした人物であったということです。

『明治維新の分析視点』の「あとがき」にはこんな一文があります。

> 今後に期したいのは、本書の視点に立つ独自の維新史を書き上げることである[76]。

まずは、「独自の維新史」が書き上げられなかったことを残念に思い、しかし、ついで、それにかかずらわなかったために――「資本主義論争の泥沼に足をつっこんで文字どおり七転八倒した」という言葉[77]を信じれば、相当な時間を要したはず――、おそらくはそれ以上に豊穣な仕事が数多く残された幸福をかみしめつつ、本日のお話を終えたいと思います。ご静聴ありがとうございました。

〔付記〕
この文章は、2013年12月23日に京都大学百周年記念ホールにて開催された上山春平記念シンポジウムにおける講演の原稿に、若干の加筆・修正を施したものです。上山あゆみさんをはじめ、シンポジウムに参加する機会を与えてくださった皆様方に心より御礼を申し上げます。

注

(1)　『上山春平著作集』全10巻（法蔵館、1994 ～ 6年）。

(2)　初出は『思想』390、1956年12月。『上山春平著作集』3所収。以下、著作集に収められた文章については原則として『著作集』から引用し、『著作集』巻数・頁数の順で表記する。引用文中の…は中略を、／は改行を示す。

(3)　宮川透『近代日本思想の構造』（東京大学出版会、1956年5月）。鹿野政直『日本近代思想の形成』（新評論社、1956年6月）。石田雄『近代日本政治構造の研究』（未来社、1956年6月）。

(4)　青山忠正『日本の近世6明治維新』（吉川弘文館、2012年）。

(5)　三谷博・山口輝臣『19世紀日本の歴史―明治維新を考える』（放送大学教育振興会、2000年3月）。

(6)　『思想』359、1954年5月。著作集未収録。

(7)　もうひとつは論理学研究プラン。こちらは、思想の科学研究会の論理学研究グループとして、翌1955年7月から開始された。メンバーは、鶴見俊輔・市井三郎・中村秀吉・石本新ら。上山春平「年譜（一九二一年～一九九四年）」『著作集』10・627頁。

(8)　上山春平「あとがき」『哲学の旅から』（朝日新聞社、1979年）292頁。著作集未収録。

(9)　上山春平「私の方法」『著作集』1・65頁。

(10)　「年譜（一九二一年～一九九四年）」、「私の方法」などによる。

(11)　「最後の回天特攻隊」など。いずれも『著作集』3所収。

(12)　半藤一利編『日本のいちばん長い夏』（文春新書、2007年）106頁。なお、本書は2010年に映画化されており、上山春平役は料理評論家の山本益博が演じた。

(13)　上山春平「大東亜戦争の遺産」『著作集』3・405頁。

(14)　北山茂夫がこの頃を回顧したものに、「回想の田辺時代」『北山茂夫・遺文と書簡』3（みすず書房、1985年）がある。

(15)　佐伯弘次・山口輝臣編『九州帝国大学法文学部の国史学・渡邉正氣オーラルヒストリー』（九州大学文学部、2010年）参照。

(16)　上山春平・松浦玲「明治維新論の再検討－「明治維新の分析視点」をめぐって」『現代の理論』60、1969年1月、62頁。

(17)　上山春平『大東亜戦争の遺産』『著作集』3・389頁。

(18)　上山春平「弁証法と形式論理学との関係」『国民の科学』9、1955年12月。『著作集』3所収。

(19)　たとえば、上山春平「あとがき　哲学と人間科学」『歴史分析の方法』247 ～ 8頁など。著作集未収録。

(20)　本節は、山口輝臣「テーマとしての明治維新―研究史から考える」徐興慶・太田登編『国際日本学の基層―台日相互理解の思索と実践に向けて』（台大出版中心、2013年）で述べたことと重複する点がある。

(21)　フリードリヒ・エンゲルス「カールマルクス：経済学批判」『マルクス＝エンゲルス

全集』13（大月書店、1964年）472頁。

(22) 下山三郎『明治維新研究史論』（御茶の水書房、1966年）10頁。

(23) 上山春平「あとがき　哲学と人間科学」『歴史分析の方法』247頁。

(24) 家永三郎「序に代へて－現代日本史学に於ける二つの学風」『現代史批判』（和光社、1953年）16頁。

(25) 同上、17頁。

(26) 歴史学研究会編『歴研半世紀のあゆみ』（青木書店、1982年）などを参照。

(27) 藤原彰「書記局開設の前後」、網野善彦「歴研への期待」、藤間生大「老兵の想い」、以上は歴史学研究会編『証言・戦後歴史学への道』（青木書店、2012年）所収。さらに井上清「党の規律と研究の自由について」『前衛』1957年9月号。

(28) ハンガリー事件がマルクス主義者に与えた影響については、小島亮『ハンガリー事件と日本－一九五六年・思想史的考察』（現代思潮新社、2003年）を参照。

(29) 伊藤隆「史料と私の近代史　第1回　共産主義との出会いと訣別」『中央公論』128－6、2013年6月。

(30) 副題に「政治の認識論をめぐる若干の問題」と付して『世界』131に掲載。のちに「『スターリン批判』における政治の論理」と改題され、『丸山真男集』6（岩波書店、1995年）など所収。

(31) 『日本史研究』30、1956年11月によれば、同年11月17日のこと。

(32) 松浦玲「上山春平著『明治維新の分析視点』」『日本史研究』105、1969年5月、87頁。

(33) 上山春平「フランス革命と明治維新」『著作集』3・56頁。初出は1959年。

(34) 桑原武夫編『フランス革命の研究』（岩波書店、1959年）。「フランス革命期のブルジョア自由主義」と改題されて『歴史分析の方法』所収。ただし『明治維新の分析視点』には入らず。さらに「フランス革命期の哲学思想」と改題され『著作集』3に収まる。

(35) 上山春平「あとがき」『著作集』3・222頁。

(36) 上山春平「維新史の方法」『著作集』3所収。初出は1962年。あわせて『日本の思想』第2部第4章「野呂栄太郎と講座派の思想」も参照。1965年初出のこちらには、「私の野呂批判は、講座派批判の一部であり、講座派批判はスターリニズム批判の一部に他ならなかった」という一文がある（『著作集』9・292頁）。

(37) 上山春平「明治維新論の現代的意義」『著作集』3・159～160頁。初出は1966年。

(38) 上山春平「明治維新の革命性」『著作集』3・9頁。初出は1968年。

(39) ただしこのことは、労農派を評価していないということを意味しない。それどころか、次のような評価を与えている。「今日の知識層の常識に投影された労農派の姿は、多くのばあい、共産党的ないし講座派的なフィルターを通した姿であり、かなりゆがめられたもののように思われる。そのゆがみをなおして、もとの姿を偏見なく検討するならば、そこに、日本土着の社会主義思想の貴重な遺産を見いだすことができるのではあるまいか」。「土着の社会主義」『著作集』9・194頁。初出は1962年。また実際の講座派批判の行論にあたっては、しばしば労農派の成果が、明示されぬ形で援用され

ている。上山維新論における労農派の陥入という問題は、本稿では扱えないが、重要な課題であろう。

(40) 羽仁五郎・上山春平「明治維新の基本的性格」『思想の科学』6、1959年6月、17頁。

(41) 前注の羽仁五郎とのもののほか、井上清や遠山茂樹と行っている。井上清「シンポジウム・最近の明治維新論とその思想的意義」『日本史研究』59、1962年3月。上山春平・遠山茂樹「明治評価の視点をめぐって」『展望』100、1967年4月。

(42) 井上清「シンポジウム・最近の明治維新論とその思想的意義」(前出)。

(43) 遠山茂樹「明治維新研究の社会的責任」『展望』84、1965年12月。

(44) 上山春平「明治維新論の現代的意義」(前出)。

(45) 遠山茂樹「学問と思想と政治―再び歴史研究の社会的責任について」『展望』93、1966年9月。

(46) あわせて羽仁五郎「近代と現代(Ⅰ)」『思想』476、1964年2月参照。

(47) 井上清「シンポジウム・最近の明治維新論とその思想的意義」(前出)。

(48) 遠山茂樹「明治維新=ブルジョア革命論について−トペパ氏にこたえる」『歴史学研究』249、1961年1月。

(49) たとえば、羽仁五郎曰く、「これは旧説に戻るにすぎない」。「講座派に対する上山君の説なんかまったく不勉強だ」。桑原武夫・竹内好・羽仁五郎・松島栄一「明治維新の意味」『中央公論』77-1、1962年1月。あるいは、「学問には目的がある…遠慮はいらぬ、上山君、目的をもってみよ、意図をもってみよ、そして学問を研究してみよ、歴史を研究してみたまえ」。「近代と現代(Ⅰ)」(前出)。

(50) たとえば、毛利敏彦(1932〜)ら九州在住の若手研究者によって1963年に創刊された雑誌『現代と歴史』4、1964年4月号の「編集後記」には、維新史論争についてこんな批評が載っている。「それらを一括して『近代化』論、修正主義のレッテルを貼り、論証ぬきで『ケネディ=ライシャワー攻勢』とか『帝国主義美化論』とかの悪口をなげつける」。「理論上の争いで具合が悪くなると、『学者の社会的責任』とか『民衆とともに』『プロレタリアートの立場』とかの心構え論や美辞麗句で逃げる傾向は、見苦しいものである。しつかりしてくれ、と言いたくなる。心構え論で片付く位なら学問など始めからやらない方がいい」。

(51) 芝原拓自(1935〜)などを念頭においている。芝原の仕事は、講座派の多様性を前提に、その新たな読み直しを行うことを通じて、講座派主流を批判したものと見ることができる。講座派内部にもさまざまな見解の相違があり、講座派内の別の議論の復興や再評価という行為が繰り返されていくことで、講座派は、曲がりなりにも、ソ連邦が崩壊する頃まで生き延びた。

(52) 伊藤隆(1932〜)・佐藤誠三郎(1932〜99)・鳥海靖(1934〜)・三谷太一郎(1936〜)・坂野潤治(1937〜)など、東京大学出身の一群の政治史家を念頭に置いている。

(53) 安丸良夫(1934〜)などを念頭に置いている。

(54) 上山春平「歴史観の模索」『著作集』2所収など。初出は1959年。

(55) 『中央公論』72-2、1957年2月。
(56) 上山春平「哲学者の自己否定」『理想』327、1960年8月。著作集未収録。
(57) 上山春平「明治維新の分析視点」『著作集』3・124頁。初出は1961年。
(58) 上山春平「維新史の方法」『著作集』3・137～8頁。初出は1962年。
(59) 上山春平「マルクス史観と生態史観」『著作集』2所収など。初出は1961年。
(60) 上山春平「比較史方法論序説」『著作集』2・500～1頁。初出は1961年。
(61) 上山春平『大東亜戦争の遺産』『著作集』3・343～4頁。「序文」の部分で初出は1972年。
(62) 『著作集』3所収。
(63) 「回顧と展望―1961年の歴史学界」『史学雑誌』71-5、1962年5月。中瀬寿一筆。
(64) 上山春平「私の方法」『著作集』1・68頁。
(65) 須田努『イコンの崩壊まで－「戦後歴史学」と運動史研究』（青木書店、2008年）121～134頁。
(66) 上山春平「まえがき」『歴史分析の方法』1～2頁。初出は1962年。著作集未収録。
(67) 上山春平・松浦玲「明治維新論の再検討」（前出）。
(68) 市井三郎・上山春平「歴史と哲学の間で」『展望』181、1974年1月。著作集未収録。
(69) 上山春平「私の方法」『著作集』1・71頁。
(70) 上山春平「哲学者の自己否定」（前出）。
(71) 市井三郎・上山春平「歴史と哲学の間で」（前出）。
(72) 「今西錦司の『生物の世界』」『著作集』9・440頁。初出は1972年。今西については、こうした表現もある。「私の眼には、おそろしく生物学に深入りしてしまった哲学者としてしかうつらない」。上山春平「今西錦司の歴史思想」『著作集』9・469頁。初出は1975年。これをそのまま上山さんに返すとするなら、上山さんは、「おそろしく歴史学に深入りしてしまった哲学者」ということになるでしょう。
(73) 上山春平「阿部次郎と教養主義」『著作集』9所収。初出は1960年。
(74) 説明が要る場合は、たとえば、山口輝臣「大正時代の『新しい歴史学』―日本文化史という企て、和辻哲郎と竹岡勝也を中心に」『季刊日本思想史』67、2005年12月を参照。
(75) 改造社、1931年。『阿部次郎全集』8（角川書店、1961年）所収。阿部次郎の方法については、「三太郎の日記・阿部次郎の日記」山口輝臣編『日記に読む近代日本3大正』（吉川弘文館、2012年）で触れた。
(76) 上山春平「あとがき」『著作集』3・222頁。初出は1968年。
(77) 注23に同じ。